

目 次

初心にかえって.....	(式部 久).....	(1)
倒れてのち止む.....	(今堀 誠二).....	(2)
総合科学部四年目に考える		
— 今, 総科一年の間では —	(編集委員一年).....	(4)
総合系大学院(修士課程)設置について.....		(6)
地域研究研究科設置について.....		(7)
環境科学研究科設置について.....		(10)
教 官 紹 介		
	スパゲッティ論議.....	(清水廣一郎).....(13)
		(久野 昭).....(15)
		(舟場 正富).....(16)
		(近藤 勝彦).....(17)
		(岩倉 国浩).....(18)
公害被害の現地で		
— その住民運動から学ぼう —	(黒岩 祐治).....	(20)
教育実習をおえて.....		(22)
昭和51年度学生生活調査報告.....		(24)
「総合科学部歌」歌詞の審査結果.....		(29)
昭和52年度春季学部長杯争奪ソフトボール大会について.....		(29)
学部の記録.....		(30)
編集後記.....		(33)

初心にかえて

式部 久



9月1日、今堀前学部長の後をうけて総合科学部長に就任することになった。会う人ごとに「大変ですね」といわれる。「ええ」と答えながら、まだその中味がわかっていないのが実情である。

それに、目下のところは、目前にせまった外国出張のことが頭にあって、にわか

に学部のことには集中できない状況である。9月19日から25日まで、ギリシア文化をめぐる国際会議がギリシアで開かれ、そこで発表するものを用意して参加しなければならないのである。場所は、小アジア沿岸（トルコ）に近いキオス島、ホメロス生誕の地と伝えられるところである。紺碧のエーゲ海を背景にそそり立つ大理石神殿のイメージがここをおどらせるが、この数年雑事に追われて勉強がお留守になりがちだっただけに、論文の中味を固めるに大童な昨日今日である。この分では旅行計画も不十分なまま飛び立つことを余儀なくされそうである。

さて、そうはいっても総合科学部のことに話をもどさないわけにはいきまい。全国的に名の知られた学部であるだけに、うかうかしておれない思いも強い。

学部は創設以来四年、来春には第一回卒業生を世に送ることになる。学年進行の上では一応の完成を見るわけであるが、内容の上では依然として生みの苦しみの中にあるといつてよい。新規教官定員60名に、学生増による教官枠12を加えて、70名をこえる大規模な教官獲得の努力がこの間つづけられた。一口に70名というが、広島にあってこれだけの陣容をととのえるのは並大抵の苦勞ではない。研究水準が高く、しかも学際的研究に意欲をもつ研究者というのが至上命令であったから、多くの関係者の文字どおり東奔西走の努力によって、やっどこまでたどりついたのである。

幸にして、前学部長の積極策が功を奏して、海外

からのUターン組をふくめ、水準以上の豊富多彩な教官陣容をほぼ完全にととのえることができたのは心強い。何ととっても、大学をささえるのは筋のいい研究者集団である。この基本要件がととのえられたことで、創設の第一段をおえたということができるかもしれない。

新たに迎えた教官の専門領域は、教養部時代のそれに比べていちじるしく多様性を増し、質量ともに完全に面目を一新した。旅行中のいま思いつくままに拾ってみても、東南アジア政治経済・ラテンアメリカ研究・キリスト教学・イタリア史・比較思想・社会行動論・生理心理学・地域開発論・技術史・多変量解析・パターン認識・グラフ理論・システム制御論・分子生物学・生態学・環境評価・環境保全等、文科から理科にまたがり、基礎から応用におよぶ幅広い編成となっている。これだけ揃ってれば、学部の看板である一般教育の充実にしても学際的研究の推進にしても、思い切ったプランがどのようにも展開されるはずだと思われる。

しかし、現状ではまだチーム編成が十分だとはいえず、さまざまなレベルでの論議をとおして、学部としての体制をととのえていかなければならない。依然として生みの苦しみのなかにあるというゆえんである。

一般教育の充実という点では、さしあたって授業科目の多様化が目標になるだろう。これは、哲学・文学・数学といった従来からの一般教育科目を軽く見る趣旨では決してない。一般教育のかなめは精神の自由な遊びにあり、伝統的な教養科目のもつ意味は、大学教育がつづくかぎり将来とも消えることはないと思われる。しかし他方では、現代の人間生活のなかで生起しつつある諸問題について、問題解決的な視点をやしなうことも必要であり、この点で、新しく学部に加わった実際の・応用的な諸分野に期待を寄せるのである。

総合科目の充実もこの線上にある。イギリスのキール大学が実施しているような大型のプログラムを組んでみてはどうか、それは一般教育の総合化への一歩ではなかろうか、と考える。

学部教育の面では、カリキュラムの見直しがさしあたっての仕事になるだろう。

「学際的研究を基礎においた幅広い専攻領域」が総合科学部のねらいとする新しい学部教育の方向であるが、その幅広さをどのようにして身につけるかは大きな問題である。「学際的」とか「幅広さ」とかをことばで語ることはやさしい。だが実際のカリキュラムの設定となると事は容易でない。関心や視野の広さと十分な基礎訓練とが結局のこなめである

うと考えるが、折角の豊富な多彩な教官陣を十分に生かし、学生の関心をみだすためには、一層の工夫が必要である。

来春からは、地域研究研究科と環境科学研究科の修士課程発足が見込まれていることでもあり、学部に対する諸方面の期待に応えるためにも、学部創設の初心にかえて大いに努力をかたむけたいと思う次第である。

(総合科学部長)

倒れてのち止む

今堀誠二

私が広島大学と関係をもったのは、1920年9月だから、57年前のことになる。このとき、広島高等師範学校付属小学校の2年に、補欠入学したわけで、それから連続して、児童・生徒・学生・教員として、この学園のお世話になった。教養部教授になってからでも26年以上になる。その前は文理大の助教授だった。この大学を、8月末日で去るわけで、多少の感慨がないではないが、さびしいと言った思いは全くない。私なりに全力を尽くしたから、思い残すことは何もない。

八月下旬でも、日本学術会議の依頼で山口に出張した日を除き、日曜を含めて、毎日、部長室に出ている。来春、開設の決まった大学院のことで、多忙を極めているからである。その中で、せっせと校正に励んでいる。「中国封建社会の構造」という、約千ページの著書の校正で、年末までに何とか出版したいと思っている。この本は、1944年に中国の農村を歩いて、史料調査と社会調査を行った、その資料をまとめた論文である。当時、中国の農村は、ほとんど中国共産党の支配下におかれていた。だから、そこに行けば、いつ殺されても、仕方がなかった。現に私が歩いていた村々でも、毎週、日本人が殺されていた。言わば、生命がけの仕事だった。それでも私は、この調査に約1年の日子をかけた。中国の古い社会構造を調べるとともに、それを打倒して、新しい歴史を作るエネルギーが、どこにあるかを明らかにするためには、死んでもよいと思っていた。

エドガー・スノーが、中共地区に入って「中国の赤い星」を著したのは1938年である。しかし、

Red Starは、学術書ではない。私が中国の農村に入り、地域研究と言う学術的手法で、革命の解明に着手したのは1939年である。当時、東大や京大にも、こうした研究を行っている人は皆無であった。ハーバード大学のフェアバンク教授は、1932—5年、1942—6年に中国に滞在しているが、私が行った様な社会調査は実施していない。

「コロンブスの卵」というが、今では毛沢東の研究はもとより、旧中国の核心が封建体制にあったこ



総合科学部玄関で(8月31日撮影)

と、商品生産の発達が重要な課題であること等は、学界の常識である。しかし、1945年以前において、こうした研究に着手した人は極めて少なかった。日本では、私一人であった。唯、折角の調査も、著書としてまとめねば、何にもならない。それを志しながら、序説を発表しただけで、本論はまだ2・3冊しか出してない。せめて前記の「構造」だけでもと思って、昨夜も徹夜で校正に動しんだが、疲労のため、能率はあがっていない。

私は被爆者ではないが、広島の大学の教官として、

原爆問題には早くからとり組み、核兵器禁止運動にも1949年以來、携わっている。占領下にあつては、マッカーサー司令部が、原爆に関する研究をすべて禁止していたから、私の原爆調査も随分と迫害された。そのため、原爆被災の実態は、まだ解明されていない。私はねばり強く、その仕事を続けて来た。今も不十分乍ら、最善と考えられる方法で、原爆被災白書をまとめる仕事に、全力を傾けている。この研究は、飯島前学長・具島長崎大学長らとの共著として、来年中には、英文・和文各300ページの著書を、岩波書店から出版する。その用意で、昼となく夜となく、忙殺されているのが実情である。

ことわっておくが、私は大部分の時間を大学のために使っている。総合科学部の創設から、地域研究・環境科学の両研究科の創設、さらに小さく言えば卒業生の就職口の開拓や、西条のキャンパス取得での地主側との談合などの為に、朝の10時から夜の10時までの間、秒きざみで、人に会ったり書類を作ったりしている。ただ、それを理由にして、自分の不勉

強の言訳にはしない。広島大学在任中に、学術書12冊、論文百数十篇その他を著わしたが、これらは私として、当然書くべきだった著作の、半にも達していないことを、反省せざるを得ない。

9月1日から、私は広島女子大学に移るが、明日からはまた新しいフェイトを燃やして、理想的な大学創造に努力したいと思っている。仕事もバリバリやるし、著書・論文もこれから本格的なものを書くつもりである。私のファンには「乞、御期待」と言いたい所だ。しかし総合科学部に残られた教職員・学生諸君が、私に負ける様では困る。それでは、初代の学部長の顔が立たない。むろん、私も諸君に負けるとは思っていない。人生は勝負だ。「倒れてのち止む」の気概で、今日までやって来た。明日もまた、これ以上充実した日はなかったと、思える程度に、頑張るつもりである。

総合科学部の皆様の御多幸を祈ってやまない。

(前総合科学部長)

